



監督・脚本＝黒木和雄／原作＝井上ひさし／出演＝宮沢りえ／原田芳雄／浅野忠信（パル企画配給／2004年日本映画／99分）

舞台は広島。原爆投下の3年後だ。自分だけが生き残ったことに負い目をもつ、主人公は、幽霊となって「恋の応援団長」を自認する父親と語り合う。黒木和雄監督が井上ひさし原作の戯曲を、忠実に映画化し、宮沢りえと原田芳雄が迫真の演技を見せる。原爆の悲劇を軸に語られる父と娘の姿は、涙なしには観られない。「これぞ日本映画の良心！」というべき感動作。

🎬 黒木和雄監督の『戦争レクイエム3部作』

この『父と暮せば』は、黒木和雄監督の『TOMORROW／明日』（88年）、『美しい夏キリシマ』（02年）に続く『戦争レクイエム3部作』の完結編。『美しい夏キリシマ』は、キネマ旬報日本映画第1位になった作品で、私の大好きな西九条にあるミニシアター「シネ・ヌーヴォ」で再三上映されていたが、観るチャンスがなかったもの。そこで、「この作品は何としても……」と思い、試写室へ。

🎬 原作は井上ひさしの戯曲

この映画の原作は井上ひさしの戯曲『父と暮せば』。こまつ座による、この『父と暮せば』の上演は、1994年の初演以来高い評価を獲得し、第2回読売演劇大賞「優秀作品賞」を受賞している。したがって、その「映画化」はかなりの冒険と思うが、黒木監督は、ほぼ戯曲どおり忠実にこれを映画化したとのこと。したがって、全編を通じて、主な舞台は、主人公美津江（宮沢りえ）の家の中だ

し、登場人物も、これと語り合う（幽霊の）父親竹造（原田芳雄）の2人だけと言ってもよいほど。しかし他方、映画の特権とも言えるCGを要所に使用し、原爆投下の瞬間のきのこ雲や、瞬時に熱線と爆風に覆われていく広島のまちの様子は、舞台では表現できない、リアルで、ショッキングなもの。

広島弁を語る名俳優と大女優

この映画は全編広島弁オンリー。私は愛媛県の松山市出身だから、広島弁や岡山弁は「田舎弁」として共通するところがあり、99%理解できるが、東京の人たちにはかなりわからない言葉があるだろう。しかし、この映画は、戯曲も含めて、全編広島弁でなければ、原爆にまつわる父と娘の悲しみと感動を表現することはできない。最初から最後まで幽霊として登場する、父親の竹造を演じる原田芳雄の芸達者ぶりは当然(?)のこと。この映画は、原爆投下の3年後の広島のおける火曜日、水曜日、木曜日、金曜日の4日間を描いたものだが、その中でも水曜日における、「鬼の体の中に入った広島の一才法師」を実演する原田芳雄の迫真の演技は、涙を誘う壮絶なもの。彼は1940年生まれだから既に64歳。すごい俳優になったものだ。

他方、主人公の美津江を演ずるのは、1973年生まれで、今年31歳になった宮沢りえ。今や、ヌード写真集騒動(91年)や、貴乃花関との恋愛の破綻(93年)は「昔話」となってしまう『たそがれ清兵衛』(02年)で、日本映画の各賞を総ナメにするなど、彼女の女優としての最近の進境は著しいものがある。そして、この映画での彼女の演技は神がかり的とも言えるすばらしいもの。父親と2人で語り合うだけの場面が99%を占めているから、下手な女優ではとても観客の目をくぎづけにし続けることなどできるはずがない。彼女の演技は、本当に最初から最後まですばらしいのひとこと。まさに31歳にして、日本映画界の大女優宮沢りえの誕生と宣言したい!

生きていることの負い目とは?

美津江は、あの原爆投下の日の、あの瞬間、偶然石灯籠の影にかがみ込んだおかげで生命が助かったが、竹造はそのそばで、12000度という太陽(6000度)2

個分の熱線を浴びて大やけど。さらに、美津江の最大の親友で、すべてにつけて美津江の上を行っていた昭子は、美津江とは逆に、たまたまその日その時広島に入っていたことによって、ピカドン（原爆）の犠牲になった。その昭子の母親を訪ねて行った美津江を、母親はいったんは喜んで迎えてくれたものの、途中から、「なひてあんたが生きとるん」と言われた美津江は、以降自分が生きていること自体に負い目をもつことに……。

浅野忠信は引き立て役でオーケー

そんな美津江だから、原爆の資料集めに熱意を燃やし、広島を訪れてきた木下正（浅野忠信）から好意を寄せられ、自分も彼に対して恋のときめきを感じながらも、「うちはしあわせになってはいけんのじゃ！」というかたくなな姿勢は容易に変わらない。そんな美津江の想いの中で現れたのが、幽霊の父親竹造。この父親は、「恋の応援団長」を自認し、木下が美津江にまんじゅうを手渡した時の行動や、それにときめきを感じた美津江の心理を分析して、美津江に対して、「幸せになることを拒否してはダメだ」と、さかんにエールを送った。

この映画（戯曲）のテーマは、この原爆投下を軸とした父娘の語りだから、木下の出番はほんの少しだけ。美津江と木下の出会いや、2人の関係がどのように発展（？）していくかを最小限観客に理解させる程度で十分なわけだ。したがって、この映画では、浅野忠信には悪いが、木下の役割は2人の引き立て役でオーケーとしよう。

泣かせるジャンケンボン

1945年8月6日午前8時15分、広島上空に現れたB29から投下された、リトル・ボーイと呼ばれる、ウラン235を使用した原爆は、上空580mで突然閃光を放った。これにより、一瞬にして原爆投下地は地獄絵となった。熱線のために顔面が焼けただけたうえ、爆風によって襲ってきた木々に押しつぶされた竹造。石灯笼のおかげで偶然生命が助かった美津江は竹造を助けようとするが、その美津江にも眉や髪が焦げる臭いが……。「早く逃げろ！」と叫ぶ竹造だが、娘はイヤだといって動かない。そこで父親はジャンケンで決めようと言い出した。そして竹

造はゲーばかりを出して、わざと負けようとしたが……。

私はジャンケンゲームが大好きで、昔はよく北新地の飲み屋でも、「最初はゲー、ジャンケンポン……！」とやっていたものだが、思わず涙がどっと溢れ出てくるようなジャンケンポンを見るのは、これがはじめて……！

日本映画の良心ここにあり！

今年2004年は、1945年の日本敗戦から59年。いよいよ憲法改正も本格的な議論になろうとしている。かつて1960年代、東宝は、お盆の時期になると、太平洋戦争をテーマとした「戦争大作」を公開していたが、いつの頃からかそれもなくなり、「あの戦争」をじっくりと見つめ直す映画も少なくなってきた。そんな中でつくられた、黒木和雄監督のこの映画は、井上ひさしの原作があるというものの、果敢なチャレンジ。また、物語に登場する舞台はほとんど美津江の自宅のみ、そして、登場人物も宮沢りえと原田芳雄の2人に浅野忠信が少しだけというもの、映画としては容易に成り立たない構成。そのような困難にあえてチャレンジしたうえ、スクリーン上に観客の目を引きつけ、涙を誘う作品に仕上げた黒木監督の力量はお見事！ もちろんこれには、宮沢りえと原田芳雄の2人の演技力が大きく寄与しているが、それ以上に黒木和雄監督の「あの戦争」に対する「思い入れ」や「信念」がひしひしと伝わってくる作品だ。まさに「日本映画の良心ここにあり！」と拍手を送りたい。

2004(平成16)年6月18日記

ミニコラム

法科大学院の初講義は？

2004年の今、戦後59年目の広島・長崎での原爆記念日、そして、8月15日の終戦記念日がやってきた。

そんな中、私は今年4月に発足した関西学院大学法科大学院での「都市

法」の第1回目の集中講義を8月7日に行なった。受講生に学び吸収してほしいのは法律の技術ではなく、私が語る戦後59年を迎えた「日本のあり方」だが……。